

〈第2章〉 研究の内容

1 はじめに～これまでの研究の経過～

【1年次の研究】

平成22年度に校内研修支援についての調査研究ということで、小樽・後志の実態を知ることから1年次の研究をスタートした。具体的には、「校内研修の現状・問題点の把握」を目的とし、道研連の13次研究のアンケートを参考にして、

- I 校内研修の内容・時間・回数について
- II 校内研修の計画・実践・評価・改善について
- III 校内研修の推進組織について
- IV 校内研修や授業研究の活性化について
- V 校内研修環境の整備について
- VI 校内研修成果の還元について
- VII 他機関との連携について

という7項目で小樽・後志の小中学校、全ての学校を対象にアンケート調査を実施した。

アンケート結果の分析から、

- (1) 授業後の研究協議に深まりがなく、効果的なふり返りとその後の改善に反映することができていない。
 - ・原因としては発言者の固定化、授業づくりにおける共通理解の不足、個々の経験年数や力量を埋める手立ての不足、十分な協議時間確保の困難等が挙げられている。
- (2) 研究の推進計画、実践の共通認識が不足している。特にふり返りが効果的に行えておらず、改善案を見出すことができていない。
 - ・原因としては評価方法の手立ての不足、教職員間での研究内容に関する共通理解の不足、研修に対する意欲や参画意識の差、研修担当の運営力不足等が挙げられている。

という2点が、小樽・後志での校内研修推進に関わる課題と判断し、これらの改善に向けた研究を進めることとした。

2年次へ向けて、研究の視点、研究内容を以下のように定めた。

○視点1 『授業研究を核とした校内研修の在り方』

研究内容：授業研究の効果的な推進について

効果的な研究協議の持ち方について

○視点2 『マネジメントサイクルを機能させた校内研修体制の確立』

研究内容：全教職員の参画意識を高める研修推進について

PDCAサイクルの「C（評価）⇒A（改善）」部分を効果的に行うための研修推進計画について

【2年次の研究】

2年次の研究は、前年度定めた視点に沿って、研究・実践交流を行った。

視点1に関しては、「全教職員が主体的に関わり研究内容の共通理解を深める」という点、また「授業後の研究協議を効果的に行いその後の改善に活かす」という点においてワークショ

ップ型の討議を計画的に校内研修の中に取り入れていくことが有効なのではないかと考え、研究、実践交流を行った。理論研修とともに3校の実践事例を基に研究を進め、ワークショップ型の研修を進める上での留意点や活用法を整理しまとめることができた。

◎ワークショップ型研修

- ・全教職員が校内研究に参画し、協働体制で研修を進めるための方策の一つである。
- ・参加者全員が共通の課題に取り組み、相互に学び合い、アイデアを出し合うなど、成果を生み出すようにすることが大切である。
- ・様々なワークショップ型研修の特徴を踏まえ、参加者全員が課題や解決策等について共通理解を図りながら協議したり、解決策を構想したりする方法を工夫する必要がある。

ワークショップ型研修を行う意義

- ①参加者全員で多面的に成果と課題を分析することができる。
- ②主体的に解決にかかわり、アイデアを積極的に出し合うことができる。
- ③多様な視点から改善策を見出し、優先順位を付けて決定していくことができる

期待される効果として

全員の参画意欲を高めることができる（全員への発言の保障、主体性の促し）。
 研究内容の共通理解を図りやすい（主体者としての関わり）。
 成果、課題の共通理解、改善策の共有化を図り、その後の実践に還すもの大きい。

ワークショップ型研修の技法とその特徴

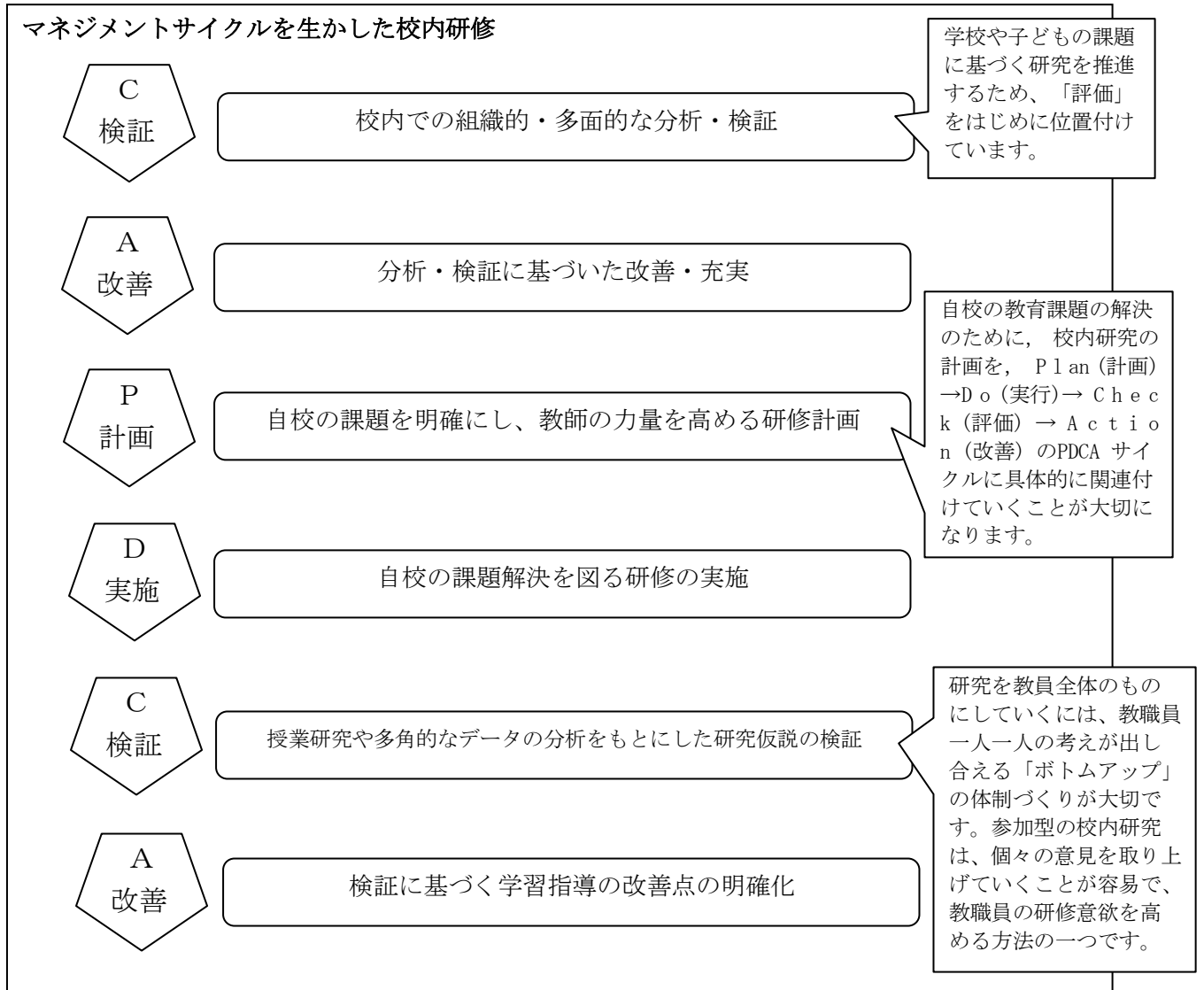
【発散技法】アイデアが不足している場合に用いる。

【収束技法】未整理な体験・アイデアが散在している場合に用いる。

【態度技法】経験や体験が不足している場合に用いる。

	技法	特徴	効果
発散技法	ブレインストーミング	①批判厳禁②自由奔放③質より量④相乗り歓迎の4つのルールを厳守し、自由にアイデアを出す。	成果や課題を考えるとといった研修に効果がある。また、短時間で参加者全員から多くのアイデアを得ることができる。
	カードBS法	ルールはBSと同じ。個人で付箋紙一枚に一つのアイデアを書いていく。その後、書いたものを発表しながら、模造紙などに貼っていく。	問題把握、問題解決のどのステップにも用いることができる。集団内の人間関係が十分でない時に効果がある。
	マトリックス	テーマが大まかで、発想の切り口を絞り込み、適切な方向を見つけ出す際に使う。変数を二つに絞って記入する。重要なブロックをいくつか絞り込みブロックごとにアイデアを出す。	現状を分析したり、課題解決する場合に効果がある。
収束技法	KJ法	発散技法で出されたアイデアをグループ分けしたり価値付けしたりする場合に用いる。出されたアイデアを内容によってグループに分け、タイトルを付けていく。	多くのアイデアが出た際に、整理を行う場合に効果がある。アイデアの中で、どれが使えるものか方向性が見えてくる。
	概念化シート	縦軸と横軸の座標軸を設定し、二対になる要素を設定し、4事象でアイデアを整理していく。	アイデアを整理し、概念化を図る際に効果がある。
	特性要因図	「特性」とは問題の結果、「要因」とはその原因の意味で、問題の結果がどのような原因で起きているか、図解化して問題点を把握し、解決策を考える。	問題点を分析し、改善点を見つけ出す際に効果がある。
態度技法	ロールプレイング	実践的な行動の場面を設定し、その場面においていくつかの役割を与え、演技させることによって、実際行動の模擬訓練を行っていく。	いろいろな立場の役割をこなすことによって、様々な気付きが生まれ、多面的な見方や考え方をさせる場合に効果がある。

視点2に関しては、マネジメントサイクルを機能させた校内研修体制の具体例を検証することにより、「授業研究の位置づけ(回数や時期)」と「年間のPDCAサイクルの中に細かなPDCAサイクルを位置づけ「評価⇒改善」を細かく行うこと」に留意することにより、効果的な研究推進ができるだろうということを確認することができた。



2 研究の視点から

視点 1

授業研究を核とした校内研修の在り方

(1) 授業研究を核とするためには

◎授業の充実

授業研究を核とするためには、授業の充実が不可欠である。研究を具現化した授業実践、その授業をみんなで作り上げるための指導案検討、授業を研究の視点から見たときの成果と課題が明確になる事後研などなど、それぞれの段階で全員が共通認識を持ち研究を進められるようにしていくことが重要である。

◎授業を語る際の共通言語を持つこと～研究主題等の決定～

全員が研究についての共通認識を持つためには、研究主題を始め、研究の視点、仮説、目指す授業像、目指す子ども像、などなどを全員が理解している必要がある。そこがずれてしまうと、同じ授業を見ても研究が深まっていくような話し合いにはなりにくい。また、中学校では自分の専門教科以外の授業については意見を出しにくい雰囲気となりがちである。

key word

- ・ 共通理解
- ・ 全員が参加

目指す子ども像や子どもにつけさせたい力を明確にし、研究の向かう方向、目指す授業像を全員が共通理解することが重要である。そのために、研究担当者は研究主題等の設定には全員が参加し、イメージや意識のずれを最小限にしていくことに十分留意する必要がある。その後の研究の推進にも大きく影響してくることを念頭に置き、計画を立てることが肝要である。

◎共通理解のために・・・ワークショップ型の協議

key word

- ・ 当事者意識
- ・ 参画意識の高揚
- ・ 共通理解

研究主題等、研究の向かう方向が全員に理解されるよう、研究担当者は年度当初に苦勞をして資料をつくり、研修の場で丁寧に説明をするということが多いのではないだろうか。

しかし、共通理解のために一番必要なことは全員が「当事者意識を持つ」ということである。全員の参画意識を高め、研究の方向性を共通理解するために有効な手法の一つとして、ワークショップ型の協議があげられる。

例えば、研究主題をきめる際に「児童の実態」を成果と課題でカードブレインストーミング法で出し合い、その後KJ法でポイントをまとめていった後に「めざす児童像」を定める。その児童像に迫るためには『どの教科で?』『どのようなアプローチで?』というように話を進めていくと、全員が研究主題の作成に関わることになり参画意識が向上し、その作業を通じて共通理解もなされることになる。

◎授業実践を通して語り合えること～指導案検討、事後検討のあり方～

研究の方向性が共通理解されたら、授業実践を行い研究を深めていくことになる。その際、授業実践が授業者だけのものとならず、一つの授業を通して組織としての研究が深まっていくようにすることが重要である。

一つの手段として、PDCAサイクルを一つの授業を中心に位置づけることがあげられる。また、そのサイクルを年間に複数回位置づけることで、更に効果をあげることが期待できる。この点に関しては【視点 2】で詳しく述べることにするが、一つの授業においてP（指導案検討）、D（授業実践）、C（事後研）、A（改善策）と位置づけ授業と研究をリンクさせていくことが大切である。

Pの指導案検討の際には、「授業者のねらい」を明確かつ具体的にすることが大切である。研究の方向性に沿って「何をねらって」「どのような手立てを取るのか」ということが明確になると、授業を見る際の視点を共通認識することができる。最低限、その視点に沿って事後研で話し合うことができれば授業者には必ず還るものがある授業実践となるはずである。

Dの授業実践では、参観者に「質より量」でどんどん気づいたことや成果、課題をメモしておいてもらうようにすることが大切である。

Cの事後研では、授業者として授業としての成果と課題と研究の成果と課題を整理してあげられるようにしたい。全体協議で事後研を行う場合には、司会者の役割が大きく影響するところである。また、活発な意見交流がなされなければ授業者にとってはやりがいのないものになってしまう。つまり事後研では、研究に沿った話し合いになっているか（＝視点が明確になっているか）という点がとても重要になってくる。

key word

- ・ 授業実践が授業者だけのものとならないよう
- ・ 「授業者のねらい」を明確に
- ・ 授業を見る際の視点を共通認識
- ・ 授業者に必ず還るものがある授業実践

key word

- ・ファシリテーター
- ・概念化シート
- ・拡大指導案
- ・暗黙の知が共有化
- ・改善策を日々実践

視点に沿った話し合いにするためにも、ワークショップ型の事後検討が一つの方策としてあげられる。参観者から出たたくさんの意見を、ファシリテーターが研究の視点に沿ってまとめていたり、ワークシートを工夫したりすること（概念化シートや拡大指導案など）により、それぞれの授業を見ての考えが研究の視点にリンクしていくことになり、参観者それぞれの暗黙の知が共有化されていくことになる。また研究への理解が参加者全員に深まっていくことが期待できる。

事後検討の場では、成果、課題に終わらずに改善の方向性の検討までを行うように留意したい。ここで改善策の共通理解が図られれば、その後参観したそれぞれが A の改善策を日々実践していくことになる。そうすることでまた、次の PDCA サイクルが始まっていく。

◎日々の授業実践の充実

つまり、授業研究を核とした校内研修を推進するためには、日常の一人一人の実践と研究とをどのようにリンクさせていくか、教職員一人一人がどれだけそのことを実感できるかという点に配慮することが重要である。

マネジメントサイクルを機能させた校内研修体制の確立

(1) マネジメントサイクルを機能させるためには

◎マネジメントサイクルとは

key word

- ・評価結果に基づく改善を組織的・継続的に
- ・年間の大きなサイクル
- ・授業を中心とした小さなサイクル
- ・日常実践を研究のサイクルの中に効果的に位置づけ

もともとはビジネス用語であるが、「校内研修」ということで位置づけると、研究、研修の目的を明確に設定し、その実現に向けた行動プログラムを策定、実行、評価し、その評価結果に基づく改善を組織的・継続的に図り、研修効果を高めていくシステムといえる。

具体的にはP（計画）⇒D（実行）⇒C（評価、検証）⇒A（改善）を年間の研修推進計画に位置づけていくことになる。しかし、C（評価、検証）⇒A（改善）の段階が上手くいかないという実態も少なくないようである。

年間の大きなサイクルの中でのC（評価、検証）⇒A（改善）を機能させるためには、D（実行）段階において授業を中心とした小さなPDCAサイクルを複数回設けることが有効である。授業を中心とし成果、課題を全教職員で共有する機会を多く設けることで、年間の研究についての理解が深まり年間の成果や課題についても共通認識を持ちやすくなる。その際、それぞれの日常実践を研究のサイクルの中に効果的に位置づけていくことに留意すると一層の効果が期待できると考える。

◎各段階ごとの留意点

◆年間のサイクルにおいて

P：計画

担当、係など一部の人のみでつくり上げないようにすることが大切である。ワークショップ型の話し合い等を利用し全教職員が関わって「自校の児童の実態や学校としての課題」を共通理解した上で計画をつくり上げていくように留意したいところである。

D：実行

日常の実践と上手く絡めていくように留意したい。そのためにも、公開研一本のみにならないよう複数の授業実践を位置づけていくことが重要である。

C：評価、検証

複数の授業実践中から見えてきた研究に関する成果と課題を全教職員で共通理解することに留意すべきである。そのためにも、全ての教職員の考えや意見を取り上げていけ

key word

- ・全教職員が関わって
- ・複数の授業実践を位置づけ
- ・全ての教職員の考えや意見を取り上げていけるような方策
- ・全員の共通理解のもと定める

key word

- ・授業者の主張が明確
- ・協議でたくさんの意見を出し合える
- ・気づきを「共有化」
- ・改善の方向性を具体化
- ・改善策をそれぞれが日常実践

サイクルイメージ

P 研修計画

p
c
a

1 次交流期間

D

p
c
a

校内研究会

p
c
a

2 次交流期間

C 研修の成果・課題・まとめ

A 次年度の方向性

るような方策を持つように心がけたい。

A：改善

改善の具体的な方策が全員に見えるようにすることが重要である。年間のまとめにおいては次年度の研究の方向性を全員の共通理解のもと定めるように留意したい。

◆小サイクルにおいて

P：計画（指導案検討）

授業者のその授業における主張が明確になっているかに留意することが重要です。授業者の主張が明確でなく且つ研究の視点にも沿わない授業計画であれば、その後の授業実践、研究協議等も辛いものとなってしまいます。指導案検討の段階で少なくともひとつは「これができていたら（このような児童の姿が見られたら）成果」というものを具体的にしておきたい。研究担当は、その授業者の主張と研究の視点がリンクするように話し合いをコーディネートしていくよう留意する。

D：実行（授業実践）

授業においては、参観者は最低限「授業者の主張」に対しての成果や課題を見取るようにする。その他、研究の視点に沿って授業を見ることが望ましいが、研究協議を活発にしたければ最初は「どんな小さな気づきや感想でもいいからどんどん出せるようにしていこう」というような言葉がけで、その後の協議でたくさんの意見を出し合えるよう準備をしておいてもらうようにするとよい。

C：評価、検証（研究協議）

研究協議の場においては、それぞれの気づきを「共有化」し研究の視点に沿って成果・課題・改善の方策を明らかにしていくようにする。また、授業者の主張に対しても成果・課題・改善の方策を明確にする（その二つがリンクしていれば一番よい）。

この段階では、共通理解をして全員が日々の実践に活かしていけるよう改善の方向性を具体化することが何よりも重要である。

A：改善（日常実践）

C 段階で具体化された改善策をそれぞれが日常実践していく段階である。日々の授業に改善策が盛り込まれているかチェックする方策や次の小サイクルの P 段階とのつながりを持たせる等「それぞれの個人まかせ」になりすぎないように留意する。